

静かな影絵

静
影絵

丸岡明

講談社版

静かな影絵 昭和四十年三月二一

五日第一刷発行 著者丸岡明

行者野間省一 印刷所

式会社 製本所有限会社大光堂黒

岩製本所 発行所株式会社讲談社

東京都文京区音羽町二(一九振)

替東京三九三〇電話東京(九四二)

一一一一(大代表) 定価四 八

著者の了解により検印廃止

©丸岡明一九六五

目次

静かな影絵

街の灯

薔薇いろの霧

落葉ふりやまず

靴音

あとがき

造本
芝本善彦

静かな影絵

丸岡明作品集

静かな影絵

序

佃島の渡ししが、いよいよ永久に廃止になると云ふ記事を、新聞で見た。この渡ししが、東京に残つてゐたおそらくは最後の渡しなのであらう。しかし写真家の藤下夫婦に誘はれるまでは、改めてその渡しを見にゆく気などなかつた。

藤下の奥さんからは、この春も、市川の精神病院へ薔薇園を見にゆかぬかと誘はれた。病院からの案内は、毎年のやうに貰つてゐながら、つい今までゆきそびれてゐたのである。

卵型の小型自動車で、藤下夫婦が迎へに来てくれて、やつとその薔薇園に出掛けた。ゆけばいっただけのことにはあつて、ながらく逢つてゐない何人かの友人に、偶然、顔を逢はせたりした。薔薇園の帰りには、言問だんごの店に寄つた。薔薇園を出た頃から降り出した夕立は、隅田川のほとりにあるだんご屋へ来るまでに、うまい具合に小降りになつた。昔とは店の位置が違ふやうだが、確かなことは分らない。

写真家の藤下君は、私より十歳若いが、七代続く東京子ださうで、言問だんごや、佃の渡

しなどに、私以上の親しみを持つてゐるやうである。佃の渡しも、この夫婦に誘はれ、例の小型自動車に乗せて貰ひ、その最後に近い様子を見ることが出来た。

春の薔薇園の時は、昨年の秋から私の母の看病につき切つてゐた女房を、たまには外へ誘ひ出さうと云ふ思ひ遣りからだつたと思ふ。佃の渡しの計画は、母が死んで、妙に元氣のない私を、慰めてやらうと云ふ氣持からのやうである。佃の渡しを見たあと、高速道路一号线で羽田にゆき、ついでに横浜まで足を伸ばして、中華街で夜の食事でもしようと云ふのであつた。

佃島への渡し場は、新たに佃橋を架ける工事のため、多少、上へ移動してゐた。その渡し場に私たちが着いた時は、ながい夏の日も暮れ、屋根のある浮き台式の発着所に、妙にうす暗い電燈が燈つてゐた。停車場と云つた頃の辺鄙な片田舎の駅とても云つた様子である。その渡し場の右手に、完成したばかりの佃橋が、街燈の螢光燈を浴びて、闇に青白く架つてゐた。橋と云ふより、逞しい高架道路の延長である。まだ開通式がすんでゐないので、自動車の交通がなく、固く沈黙を守つた風景だつた。

水に浮いた発着所にゆくと、そこには二十人余りの人影がゐた。渡しは、蒸氣船に曳かれて、黒い水の上を、すぐ眼の前の佃島から引き返して来るところだつた。

幼い頃の私は、この渡しを、幾度か利用してゐるわけだつた。月島に母の里の紡績工場があつて、そこへよく遊びにいった。勝鬨カチゴウの渡しでゆくか、この佃の渡しでゆくかである。まだ小学校へ通ふ前のことであつた。勝鬨の渡しと佃の渡しとが、どう違つてゐたかなどは覺

えないが、この二つの渡し場の名は、一時期の私に、極く親しいものだった。

母の里の紡績工場は、小石川柳町から月島へ移つていったが、住まひだけは、月島に渡る手前の小田原町だったことがある。人力車に乗り、母の膝に抱かれて、ある日の夕刻、叔母たちがゐるその小田原町の家へいった。急な話でもあつたのだらう。母は二階へ姿を消し、私は叔母の一人に早速なにか食べさせて貰つてゐたが、あまりに皆が私に無関心であるやうなので、眠くてならぬやうな振りをした。するとそれが本当になつて、いざ母が帰る時には、もうどうにも抵抗が出来ぬ深い眠りに、無理矢理、私の体が埋められてゆくのを感じた。

母についての幼い私の記憶は、いつもさうした形で思ひ出されて来る。直接、母の姿や母の声は、思ひ浮かばず、常に、なにかの媒介による。

幼年時代の私は、父の母である祖母に愛され、ひとつ家にも、祖母の部屋で寝起きをしてゐたためだらうか……。

赤い電燈をつけた蒸気船が、客船を曳いて近づいて来た。うす暗い発着所にゐた人群れのうちに、写真機を取り出す者が、少くも、二人三人はゐた。数日後には姿を消すこの渡しを、記録に留めて置かうと、わざわざ来てゐる人たちだった。

当然支払はれるべき渡し代金が、たゞであるのも、時代にそぐはぬ奇妙なものだった。なぜたゞでいいのか、昔からさうだったのか、そんな疑問が残つた。

渡しが佃島に着くと、自転車を持った幾人かが、すぐ浮き台の発着所に移り、そのまま走り去つていった。さうあるべきことに、なにも不思議はないが、それを見て、あゝ、昔もさ

うだつたな、と思ひ浮かんだ。蒸気船に曳かれた客船は、一段船底に降りると、そこには左右にガラス窓があり、布を張つた椅子の設備がある。私の幼年時代のものは、おそろくかうではなかつたらう。蒸気船が曳いてゐたかどうかともあやしいが、曳いてゐたとしても、ただの和船ではなかつたらうか。

母は渡しから、暗い水の底へ、幾度か引き込まれさうな気がしたものだと言つたことがある。自殺をする気持は、きつとそんな風なものだらうと云つた。ふと思ひ出したが、渡しに乗つて、黒い水面を見るまでは、全く忘れてゐた記憶である。

母方の祖父は、工場が柳町から月島へ移ることになつた直前の夏に死んだ。工場の経営は、取り敢へず、母の上の妹の連合が引き継ぐことになつた。その長谷部の叔父は、写真でしか知らぬが、実直さうな人柄だつた。土木技師で、信濃川の河口工事に携つてゐた筈である。その叔父が、工場のベルトに捲かれ、無惨な死を遂げたのは、工場に来てから三月もたぬうちのことだつた。

不幸が続いて、たゞりのある工場だと云ふ噂が立つた。それを、父がひき受けたのである。土木技師の工場経営も、見当違ひには違ひないが、もともと歌人で、謡本の出版はしてゐても、書齋人でしかない父は、どう云つてみたところで、長谷部の叔父以上に、畑違ひの人間だつた。しかし私には、父がそれを引き受けて、大いにやり度く思つたらう気持が、分らぬでもない。また父が出てゆかねばならぬ、周囲の事情もあつたであらう。

第一次大戦は、父が工場を引き受けた一年後に、勃発した。業界の様子は、今までとがら

りと変つて、コスト高になり、素人の手になど、負へぬものになつた。月島に並んでゐた他の紡績工場は、操業時間を短縮して、それを乗り切る策を立てたが、契約を手いっばい抱へ込んでゐた父は、無理な夜業を続け、金のやり繰りで、その始末をつけようと計つたものらしい。

話としては、いづれ終る戦争のことだから、この素人作戦も面白いが、母方の祖母の眼から見れば、氣違ひ沙汰としか映らなかつた。母は、父と祖母との間に立ち、誰も救ひやうのない苦しみを嘗めた。金策に歩くのは、母の役だつた。それも相当の大金である。叔父たちは、まだほんの子供で、下の叔父などは、小学校へ通つてゐた。父は苦境の工場を背負ひながら、二人曳きの人力車に乗つてゐた……。

渡しが佃島に着いたあたりは、関東の大震災にも、今度の大戦の空襲の時にも、被害を受けずにゐた一区劃らしい。家の構造が、今日では東京の街なかで、めつたに見られぬ類のものである。私たちは、その家並みに興味を持つて、狭い路地を抜けていつた。家の前に縁台を置き、老婆がひとり涼んでゐたり、裸におかに半纏を着た若者が徘徊してゐたりするのである。

東京の下町から、既に消え去つた風俗であるばかりでなく、地方では決して見られぬ風俗だつた。路地の奥の明け放した一軒に、金の二枚屏風を立て、三尺立方ほどの金泥塗りの獅子頭を二つ飾つた家があつた。水引をかけ、二本束ねた一升壘が、その前にそなへてある。完成した佃橋の渡りぞめには、この獅子頭も参加するのだと、その家のかみさんが云つた。

出来のたしかな彫刻である。いづれ来歴があるのだらうが、その話は聞かなかつた。

再び渡し場の前に戻ると、藤下の奥さんは女房を誘つて、一軒の佃煮屋に立ち寄つた。買ひ物をすませ、また渡しに乗り、京橋口から、高速道路一号線に出た。

私は母の死以来、体がひどく疲れてゐた。いい歳をして、さう云つちやあ、阿房みたいな話だが、やつとこれから、ひとり歩きをしてゆくやうな気持だつた。自分で自分に、さう云つて聞かせてみるのである。酒は医者に止められてゐるが、今までは結構、うまく飲んだ。その酒までが、飲めなくなつた。

羽田までの高速道路は、初めてではあつたが、どこをどう走つてゐるのか、夜のことで見当がつかず、興味も大して湧かなかつた。モノレールの高架電車が、私たちの走る道路と平行して、試運転をしてゐた。螢光燈で青く光る車内に、人影がなく、大きな蛾が、不気味に飛ぶのを見るやうだつた。

羽田の空港の脇を抜けて、横浜へいつた。横浜の中華街へは、久しくゆかなかつたが、その賑やかな様子が、ガラスに油絵の顔料で描いた街のやうにしか、眼に映らぬのである……。

I

月島の紡績工場を潰したのは、事情がどうあらうと、確かに父の責任だつた。

大磯で夏を過した私の最初の記憶は、小田原町での思ひ出よりも、さう大して古いものでは

ない。裸の叔父たちが、座敷で大の字になつて寝てゐるのに習ひ、私も大の字になつて仰向いてゐた。私には叔父たちが、一人前の男に思へてゐたが、上の叔父が、せいぜい中学校の一、二年、下の叔父は、当時まだ小学校の生徒だった。

寝転んで、天井を向いて、歌を歌つてゐると、誰かが口へ、さぐえの壺焼きの切り身を入れてくれるのである。祖母であつたか、四人ゐる叔母のうちの、上の方の誰かだっただらう。

家を一軒借りてゐた夏と、宿屋の部屋にゐた夏とが、思ひ浮ぶ。

大磯へいつた最初の頃のさうした私の姿は、総べて母方の里の世話になつてゐる日々の断片だが、それに続く後年のものは、主体が、私たちきやうだいに變つてゐる。父の責任もあつて、叔母や叔父たちの世話を、今度は父が見る番だった。この場合、父よりも多く、母が苦痛を背負つただらうが、私にはさうした暗い母の記憶は全くない。

そのやうな父や母の世界を知るには、まだまだ私が幼な過ぎたわけだが、父が死ぬまでの母は、殆んど父につき切りで、母の実体など、私の眼には見えなかつた。

子供が殖えて来たために、私たちきやうだいは、母屋とは別棟の「裏の家」に住むやうになつた。もと按摩夫婦が住んでゐた、ぼろ家である。

私が幼年時代から関東の大震災に逢ふまでを過した、九段下のこの家のあたりは、下宿屋の多い今川小路と云ふ奇妙な町だった。父たちのゐる家の筋向ひは、法律専門学校と云つた専修大学の前身校で、電車通りから、この横道に這入る右角には、石堀の御岳さんの境内が

あつて、辻待ちの人力の車夫が、小型の木製の椅子に腰をおろし、所在なく陽に當つてゐたりした。

長男であると言ふ理由で、私を特別に鼠舩にしてゐた父の母である祖母は、私たちが「裏の家」に移つて、暫らくすると、下渋谷の庭の広い家で、別に一人で住むやうになつた。書生の一高生の原口さんと、中学へ通ふやうになつた母の下の弟である叔父とが、玄関脇の細長い部屋で、机を並べてゐた。

この下渋谷の家には、一時、母方の祖母たちが住んでゐたことがある。桃の木の林があつたり、実のよくなる大きな栗の木があつた。ひと間だけ、まだガス燈の座敷があつて、夫を失つた長谷部の叔母が、その部屋で琴を弾いてゐた。

按摩のゐたぼろ家に移つてからの私は、きやうだいたちの餓鬼大将だつた。最後には、妹三人、弟二人の六人きやうだいになつたが、その頃はまだ弟たちが生れてゐなかつた。

母は毎朝、母屋から来て、そのぼろ家の縁側で、髪を梳き、子供たちの朝晩の齒ブラシを、やかましく云つた。それを日課にしてゐたのであらう。庭には、藤棚があり、ぶらんこがあつた。後にその藤棚が取りこはされて、大人たちのための土俵が出来た。痩せた父も相撲を取つたが、強くはなかつた。父の妹の連合である国文法学者の松川の叔父が、肥つてゐて力があつた。

その「裏の家」の入口の脇には、人力車の車庫が出来、人力が二台這入つてゐた。天窓のある黒く煤けた台所の天井や、もう余ほど前から使つてゐないコンクリート囲ひの古戸